

鶴橋 俊宏 提出 学位申請論文

『近世語推量表現の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、三部十五章からなるものである。

本論文は、宝暦期歌舞伎台帳・洒落本・咄本・人情本・滑稽本などの近世後期江戸語の口語資料および駿河方言資料の資料価値を検討した上で確実な用例に基づいて推量表現の実態を説明する実証的な日本語学的方法を用いて近世日本語の史的変遷を説明した論文である。

第一部「江戸語の推量表現」では、ダロウ（活用語承接のダロウ、およびノダロウ）の語誌を中心とした推量表現の通時的研究で、江戸語から東京語への変化を視野に入れたものである。対象は、蓋然性の程度や推量判断の根拠とは関わら

ない、単純推量（現在の事実から未来の事態を推量する）のウ・ヨウ、デアロウ、ダロウ、デシヨウ、および事情推量（事実から原因・理由を推量する）のノダロウを扱う。研究の目的は、単純推量におけるウ・ヨウからダロウへの交替を明らかにし、事情推量のノダロウの定着の過程を記述することにある。

第一章「先行研究および研究資料」では、ウ・ヨウは、江戸後期にダロウに推量を譲り、専ら意志・勧誘を表わすようになり、意志と推量とが別の形態に分化していくが、それは、ウ・ヨウの多義性を排除する形で進行する。従来、ノダロウへの言及は少なく、いつ文献に現れるかは不明であった。資料は、話し手と聞き手との関係を考慮しなくてはならないので会話体資料であることが望ましい。最も重視すべき資料は、洒落本、滑稽本、人情本であるとする。

第二章「宝暦期歌舞伎台帳の推量表現」では、非活用語に付く推量辞には、デアロウ、デゴザロウなど「デ（ニ）十存在詞十ウ」の他、ジャロウ、デエシヨウ、ダンベイが見られたと指摘する。事情推量のノジャロウが見られることか

ら、ノダロウ成立の基盤はできていたと推察している。

第三章「洒落本の推量表現」では、第一節「明和期～寛政期のウ・ヨウとダロウ」第二節「享和期以降のウ・ヨウとダロウ」で、ウ・ヨウからダロウへの交替を、各々の上接・下接語の違いに注目して、その実態を述べている。寛政期までのダロウは、上接語は専ら動詞で、下接語は助詞を伴わない形やネ、ノなどを伴う例が多い。確認要求・当為性の表現に傾斜しており、疑問の終助詞カを下接しないなどの特徴があると指摘する。享和以降は、形容詞型活用語に接続するダロウや、カを伴うダロウが現れる。ダロウが確認要求や当為性の高いダロウネに傾斜しながら、疑問文に生起しにくかったのは、不確かさの度合いが現代語とは異なっていたのではないかと指摘している。第三節「江戸洒落本におけるノダロウ」では従来ノダロウの出現は不明とされていたが、安永期から既にあることを明らかにしている。ノダロウは、まず代名詞性の高い準体助詞ノにダロウを伴ったものが現れ、やや遅れて事情推量の例が現れるが、疑問詞と共起する例（以下

「ナゼノダロウ」は確認されないとする。第四節「江戸洒落本におけるデアロウ」では、ダロウ・ノダロウの成立過程における、デアロウの使用実態を洒落本の表現様式に関連づけて説明し、また、デアロウは、ダロウ・ノダロウと同様、既にデアロウとノデアロウに分化していたと推測する。

第四章「江戸咄本の推量表現」では、江戸語の推量表現におけるダロウの伸長を調査し、併せて、江戸語資料としての咄本の性格にも言及した結果、洒落本の調査結果と矛盾するものではなかったとする。

第五章「人情本の推量表現」では、第一節「文政期人情本における推量表現」で資料的価値を検討するために、推量表現を一つの指標としてその使用言語の実態を述べている。少なくとも文法研究に関してはあまり有用ではないが、ノダロウの新用法が見られたように、古い形が多い中にも新しい形が混在している事例もあると指摘している。第二節「為永春水の人情本におけるダロウ・ノダロウ」では、形容詞、マス、ナイなどに付くダロウがあり、洒落本には見つかっていな

い「ナゼくノダロウ」が見られ、各々の用法の拡大が確認できるとする。第三節「天保以降の人情本におけるダロウ・ノダロウ」では、天保期以降の人情本のダロウ・ノダロウの実態を論じて、ダロウの上接語は、マスダロウの発生など新しい形式が見られる一方で形容詞接続はまだ少ないこと、ノダロウは、安永期から存在する、先行するコンテキストに原因理由を推量する用法に加え、「ナゼくノダロウ」が生じ、「ナゼくダロウ」と併用されることを指摘する。

第六章「滑稽本の推量表現」では、第一節「式亭三馬の滑稽本におけるダロウ・ノダロウ」で、ダロウはネエダロウ以外全て動詞・補助動詞に付き、十八世紀洒落本と同じような傾向を示すが、確認要求表現は少ないこと、ノダロウの使用はわずかであり、「ナゼくノダロウ」はないことを指摘する。第二節「滝亭鯉丈の滑稽本におけるダロウ・ノダロウ」では、文政期の滑稽本における単純推量はもっぱらダロウでウ・ヨウは少なく、形容詞や助動詞に下接するダロウが見られ、おおよそ春水人情本と同様の結果を得ており、春水人情本よりも早い「ナゼ

ノダロウ」の例を見出している。その結果、江戸語のノダロウの用法の伸張の様を、Iノが体言の代用をするもの、ノが形式名詞的なもの（安永）、II原因理由推量（【或る既定の事柄に対する原因理由・背後の事情・問題の実状】ノダロウ（安永）、II不定詞ノダロウ（寛政頃）、II^ルドウシタノダロウ（天保）、IIIカラノダロウ（原因理由・背後の事情・問題の実状が条件句で示されるもの）（文政）、IVナゼノダロウ（文政）、V方法・手段を問うもの（天保）、VI推量確認要求（寛政頃））とまとめることができる。

第二部「推量表現の周辺・江戸語の資料について」では、第一章「助動詞ウ・ヨウの命令表現用法」で近世後期語のウ・ヨウの命令表現は、勧誘に紛れない、尊敬語を伴う用法に傾斜している。これは、意志・勧誘の用法に専用されるようになっていく、ウ・ヨウの歴史的変化の過渡的様相と言え、推量の退化と軌を一にするものであると指摘する。

第二章「江戸語の比況表現―ミルヨウダ・ミタヨウダについて―」では、近世

後期のミルヨウダ、ミタヨウダは後にミタヨダ、ミタイダに変化しており、目に見えないものを受ける例が現れ、動詞の意味を喪失し辞化していく過渡的様相を確認している。

第三章「洒落本『祇園祭焼燈蔵』に描かれた「お屋敷ことば」では、町人女性の武家屋敷奉公における言語の実態を音韻・敬語を中心に調査している。

第四章「朧月亭有人『春色恋廻分解』における江戸語について」では、末期人情本の資料性を検討するために、推量表現、待遇表現の実態を分析している。

第三部「近世駿河方言資料と方言推量辞」では、江戸語に生じた推量辞の変化が個別的な現象なのか否かを解明するために、駿河国を中心とした近世方言における推量辞の実態を記述している。地方語の歴史的研究は資料が少なく、その方言の正確さの評価も十分ではないので、方言描写の信憑性の検証に多くの部分を割いている。

第一章「近世後期駿河方言資料」では、江戸後期に出版された滑稽本、洒落

本、地誌に描かれた駿河方言を比較検討し、各々の言語資料としての信頼性を考察している。

第二章「『東海道中膝栗毛』の駿河方言」では、『東海道中膝栗毛』に描かれた駿河方言の方言記述の信憑性を、第一節で一九の生国である駿河のことばを文法の面から検討して、打ち消しのナイとヌ（シ）、推量辞ベイとズ、接続助詞カラとンデの地理的分布は、後世の実態と矛盾しないことを明らかにしている。第二節では音韻の面で、連母音の融合は後世とは異なる傾向を示し、助詞の融合はほとんど同じであることを明らかにして、一九の方言描写は、駿河に関しては再評価されるべきであると指摘する。

第三章「その他の滑稽本に於ける駿河方言」では、『滑稽江の嶋美やげ』などを調査し、近世駿河の語彙、文法の実態を詳述して、『膝栗毛』の調査結果を補強するデータが得られた他、後世と共通する俚言も多く、方言描写を評価する有力な根拠が得られたと指摘する。

第四章「『東海道中膝栗毛』のベイ・ズ・ウズ」では、『膝栗毛』の方言記述を、推量辞ベイとズの地理的分布と用法の面から考察し、使用者、使用地域に疑問点があり、駿河を一步出ると東海道地域においてさえも信憑性に疑いが残ると指摘する。

第五章「デアラズ小考」では、現代静岡方言の推量辞ダラの淵源を江戸滑稽本に求め、また、近世駿河く現代静岡の推量体系の変化の、江戸語・東京語とは異なる点、共通する点を指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世後期江戸語の口語資料である宝暦期歌舞伎台帳・洒落本・咄本・人情本・滑稽本などおよび駿河方言資料の価値を十分に検討した上で、それらから収集した確実な用例に基づいて近世における推量表現の実態を、実証的な

日本語学的方法で解明した論考として高く評価する事ができる。

第一部は六章からなり、第一章では中村通夫・原口裕に始まるウ・ヨウからダロウを用いる語法への推量表現の交替についての研究に用いる言語資料として通時相においても共時相においても研究目的に合った資料の選択を重視するのは、言語史研究の正統というべき研究態度である。第二章では後期江戸語推量表現研究史の前史というべき宝暦期歌舞伎台帳において非活用語に下接する「デ(ニ)十存在詞十ウ」などの他に事実推量のノジャロウの存在を指摘したのは、ノダロウ成立の基盤を推測させるもので貴重である。第三章は四節に互って後期江戸語の言語資料の中でも特に写実的で口語性に優れた洒落本を対象として、ウ・ヨウからダロウへの交替の実態を上接語・下接語の違いに注目して分析して詳細な考察を加えている。その結果、明和期から寛政期までのダロウの上接語が動詞中心であるのに対して、享和期以降は形容詞型活用語に下接するダロウや、カを伴うダロウが出現し、また、従来出現時期が審らかでなかったノダロウが安永期から

すでに存在するが、疑問詞と共起する「いまじぶんなぜあねへにいそがせるたろうの」(『総籬』)などの例に対応するノダロウの例は確認できないこと、さらにダロウ・ノダロウと同様にデアロウとノデアロウに分化した過程など多くの推量表現形式の実態と変遷を解明しており、本論文の中核をなして圧巻である。ただし、洒落本はいかに言語描写が写実的であるとはいえ舞台が遊里に偏っているため江戸語の全体像を分析する資料としては疑問を呈する見解があるのも事実である。それを補うのが第四章で江戸語資料としての咄本の性格を慎重に踏まえながら調査を加えて前章で見た洒落本における推量表現の実態と矛盾しない結果を得ているのも、頗る妥当な研究方法であるといえる。第五章ではこれらに続く人情本における推量表現を通時的研究の一環としての語法資料として扱いに慎重を要する文政期の人情本を調査した上で、言語資料としての価値が高い天保期の為永春水の人情本を調査して、形容詞・マス・ナイに下接するダロウ、ナゼノダロウの出現、天保期以降の人情本におけるマスダロウの発生など新しい形式の諸

相を解明して、併せて言語資料としての人情本の特色を明らかにするのも、本論文に一貫する慎重にして入念な資料選択の成果であるといえる。これら人情本における慎重な実態調査を踏まえた上で、先学によってノダロウの使用が少ないことが指摘されている滑稽本を第六章で式亭三馬と滝亭鯉丈の二節に互って調査し、春水の人情本と同様の結果を得て江戸語におけるダロウ・ノダロウを中心とする推量表現の伸張の実態を解明している。

第二部は四章からなり、推量表現の周近的な形式と江戸語資料自体の性格を分析している。第一章ではダロウに推量の用法を譲った助動詞ウ・ヨウにおける相手の動作を要求する「火のよふじんさつしやりませう」（『広街一寸間遊』）などの命令表現用法、第二章では近代にミタイダが定着する以前に行われていた比況表現ミルヨウダとミタヨウダという頻用されない言語形式を対象としてコーパスのない江戸語資料から丹念に用例を採集して分析している点は高く評価されるべきであろう。第三章では洒落本『祇園祭桃燈蔵』、第四章では人情本『春色恋廻

分解』を取り上げその言語の特色を分析しているが、前者は忠臣蔵のパロディであり「お屋敷ことば」の資料としての妥当性についてはやや疑問が残るところである。

第三部は、五章からなり、近世駿河方言の資料価値の分析とそれらにおける推量表現の考察である。第一章で近世駿河方言の諸資料の言語資料としての信頼性を考察し、第二章で『東海道中膝栗毛』の駿河方言を音韻・語法に互って考察し、第三章でその他の滑稽本における駿河方言について考察した上で、第四章で『東海道中膝栗毛』における意志・推量の助動詞ベイ・ズ・ウズ、第五章でデアラズを考察している。上方・江戸に言語資料が偏ってそれ以外の地域に言語の実態を体系的に分析しうる資料に乏しい近世期において駿河という特定の地域の方言資料を反映する資料の性格と方言の特色を考察した上で推量表現を詳しく分析しており、資料的制約の中で可能な限り近世駿河方言の実態を解明したと評価することができよう。ただし、文献による資料制約があるため致し方のない点で

あるが、俚言として示された言語資料に時代差や資料の位相についての言及があれば、文献研究と方言研究の融合による方言日本語史の発展にさらに貢献できたと思われる。

全体としてその方法は言語形式の変遷や用法の相違を恣意的に描いてそれに当てはまる用例を優先して大胆な言語現象の解明とすることを潔しとしないため、ややもすれば考察に物足りないとする批評を受ける場合もあるが、そうした批判を確固たる用例とその正確な解釈に基づく日本語学的研究方法によって得た圧倒的な言語史的事実の解明によって封ずることで応えている。何よりも本論文の真骨頂は、自らがコンピュータを駆使した日本語文献の電子テキスト化の先駆的存在でありながら、近時盛行する既成のコーパスから検索した用例・使用状況を繋ぎ合わせて史的変遷や用法の相違を論ずる安易な研究方法を排して、近世語の文献の個々の言語的特徴を充分把握した上で、眼光紙背に徹する読解を踏まえて精力的に採集した用例に徴してダロウを中心とする近世後期江戸語の推量表現の実態

をきわめてオーソドックスな正攻法で解明した点にあり、今後の若手研究者の研究や研究方法に大きな影響を与えるもので高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、鶴橋俊宏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十六年三月十一日

主 査 國學院大學教授 諸 星 美智直 ⑩

副 査 國學院大學教授 カイザー・シユテファン ⑩

副 査 國學院大學教授 久 野 マリ子 ⑩

【訂正】

12頁9行目

「火のよふじんさつしやりませう」〔『広街一寸間遊』

↓「火のよふじんさつしやりませう」〔『広街一寸間遊』

12頁13行目

『春色恋廼分解』

↓『春色恋廼分解』

13頁8行目

『東海道中膝栗毛』における

↓『東海道中膝栗毛』における